

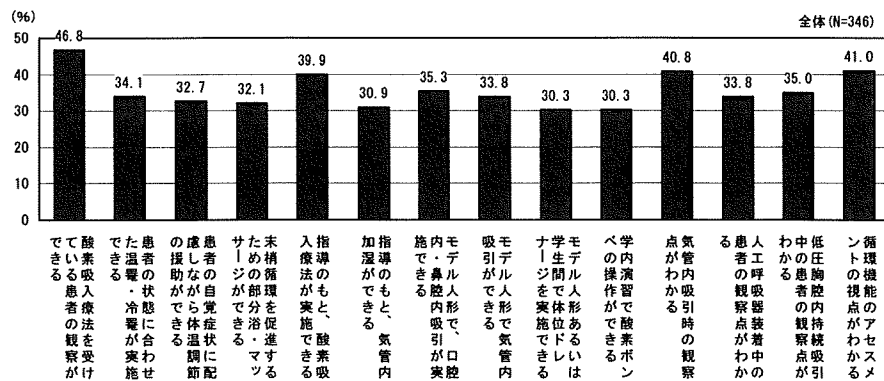
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑥呼吸循環を整える技術

・「酸素吸入療法を受けている患者の観察ができる」(46.8%)が最も高く、次いで、「循環機能のアセスメントの視点がわかる」(41.0%)、「気管内吸引時の観察点がわかる」(40.8%)、「指導のもと、酸素吸入療法が実施できる」(39.9%)などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑥呼吸循環を整える技術》



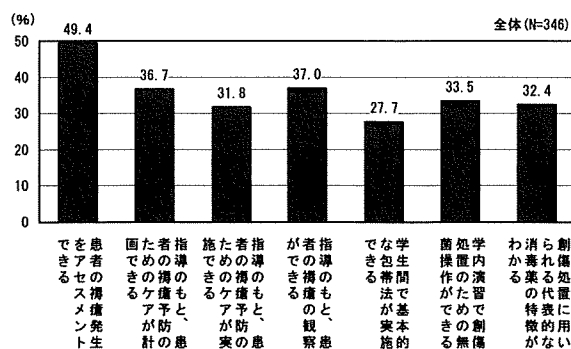
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑦褥瘡管理技術

・「患者の褥瘡発生をアセスメントできる」(49.4%)が最も高く、次いで、「指導のもと、患者の褥瘡の観察ができる」(37.0%)、「指導のもと、患者の褥瘡予防のためのケアが計画できる」(36.7%)などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑦褥瘡管理技術》



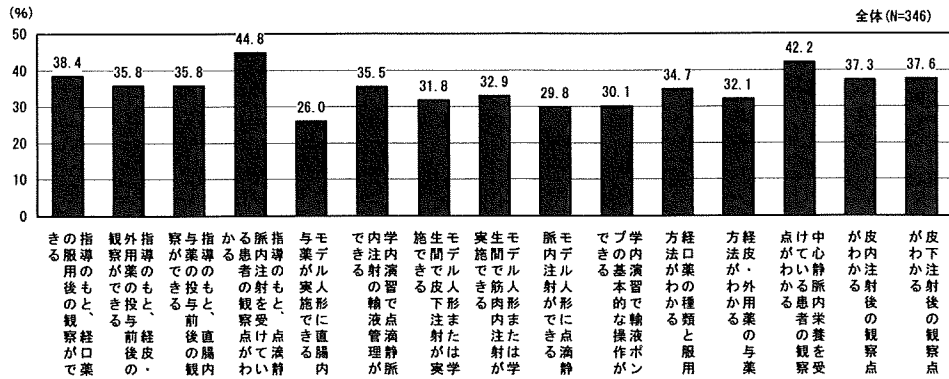
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑧与薬の技術

・「指導のもと、点滴静脈注射を受けている患者の観察点がわかる」(44.8%)が最も高く、次いで、「インシュリン製剤を投与されている患者の観察点がわかる」(43.6%)、「薬理作用をふまえて静脈内注射の危険性がわかる」(42.8%)、「中心静脈内栄養を受けている患者の観察点がわかる」(42.2%)などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑧与薬の技術》

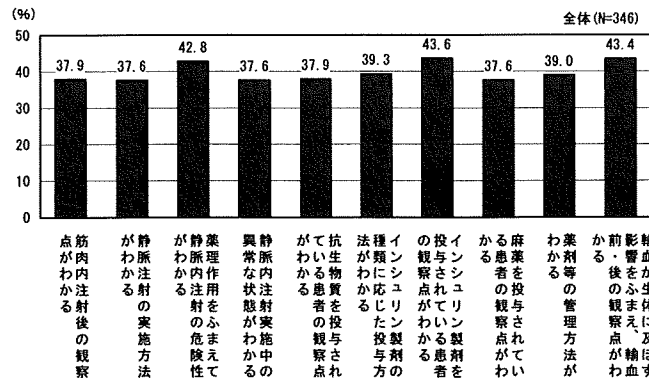


2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑧与薬の技術

《出題が必要と考える項目 ⑧与薬の技術 (続き)》



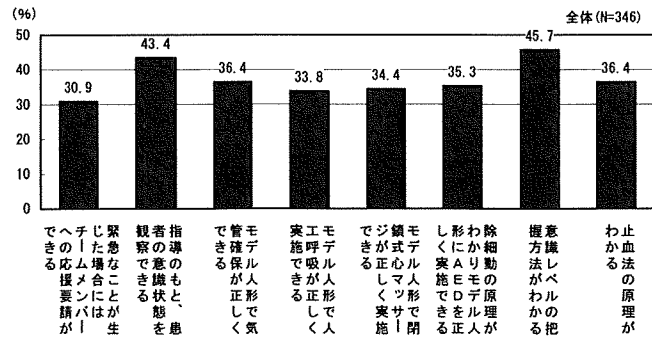
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑨救命救急処置技術

・「意識レベルの把握方法がわかる」(45.7%)が最も高く、次いで「指導のもと、患者の意識状態を観察できる」(43.4%)などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑨救命救急処置技術》



50

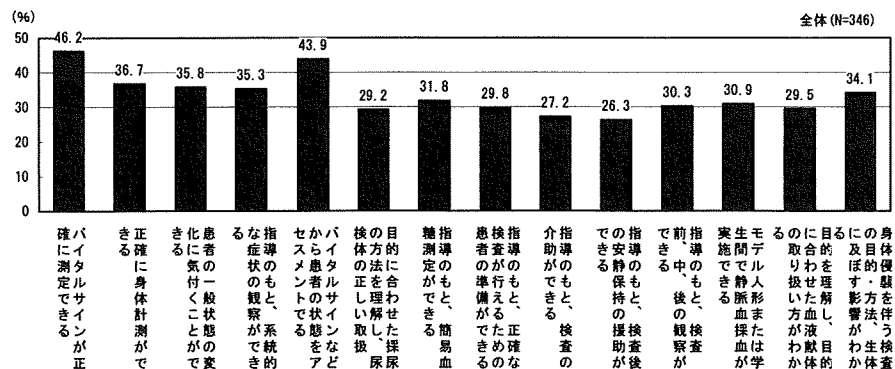
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑩症状・生体機能管理技術

・「バイタルサインを正確に測定できる」(46.2%)が最も高く、次いで、「バイタルサインなどから患者の状態をアセスメントできる」(43.9%)などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑩症状・生体機能管理技術》



51

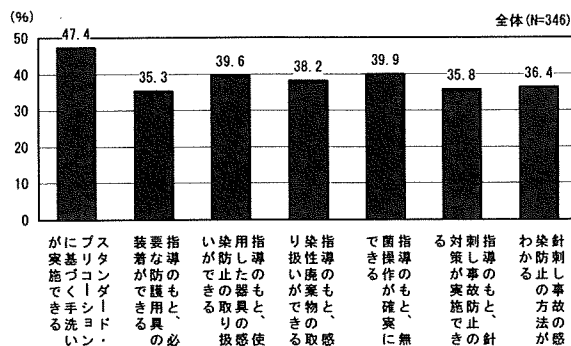
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑪感染予防の技術

・「スタンダード・プリコーションに基づく手洗いが実施できる」(47.4%) が最も高く、次いで「指導のもと、無菌操作が確実にできる」(39.9%)、「指導のもと、使用した器具の感染防止の取り扱いができる」(39.6%)、「指導のもと、感染性廃棄物の取り扱いができる」(38.2%) などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑪感染予防の技術》



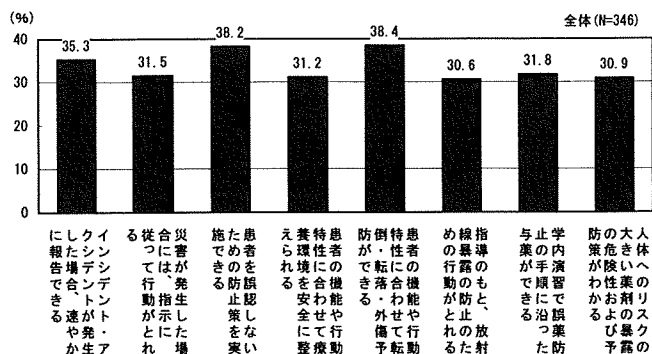
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑫安全管理の技術

・「患者の機能や行動特性に合わせて転倒・転落・外傷予防ができる」(38.4%) が最も高く、次いで、「患者を誤認しないための防止策を実施できる」(38.2%)、「インシデント・アクシデントが発生した場合、速やかに報告できる」(35.3%) などの順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑫安全管理の技術》



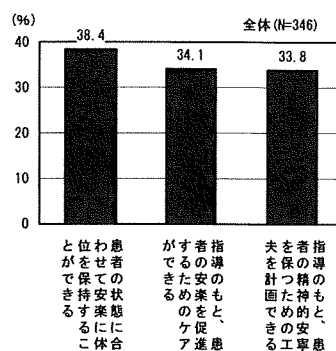
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(2) 出題が必要と考える項目 ⑬安楽確保の技術

・「患者の状態にあわせて安楽に体位を保持することができる」(38.4%)が最も高く、次いで「指導のもと、患者の安楽を促進するためのケアができる」(34.1%)、「指導のもと、患者の精神的安寧を保つための工夫を計画できる」(33.8%)の順となっている。

《出題が必要と考える項目 ⑬安楽確保の技術》



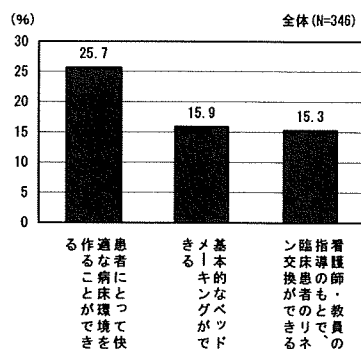
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ①環境調整技術

・「患者にとって快適な病床環境を作ることができる」(25.7%)が最も高く、次いで「基本的なベッドメイキングができる」(15.9%)、「看護師・教員の指導のもとで、臨床患者のリネン交換ができる」(15.3%)の順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ①環境調整技術》



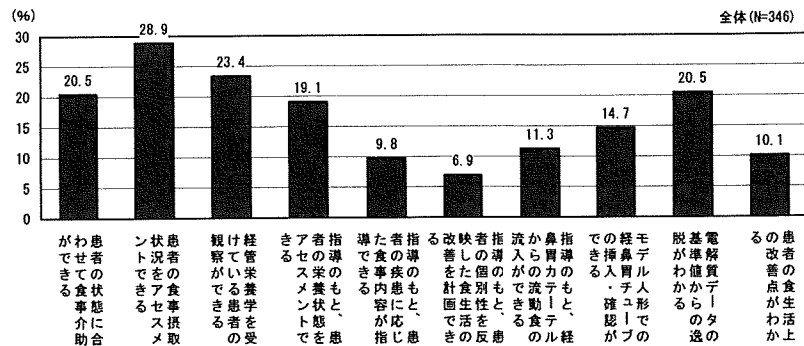
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ②食事の援助技術

・「患者の食事摂取の状況をアセスメントできる」(28.9%) が最も高く、次いで「経管栄養学を受けている患者の観察ができる」(23.4%)、「患者の状態に合わせて食事介助ができる」および「電解質データの基準値からの逸脱がわかる」(いずれも20.5%)、「指導のもと、患者の栄養状態をアセスメントできる」(19.1%) などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ②食事の援助技術》



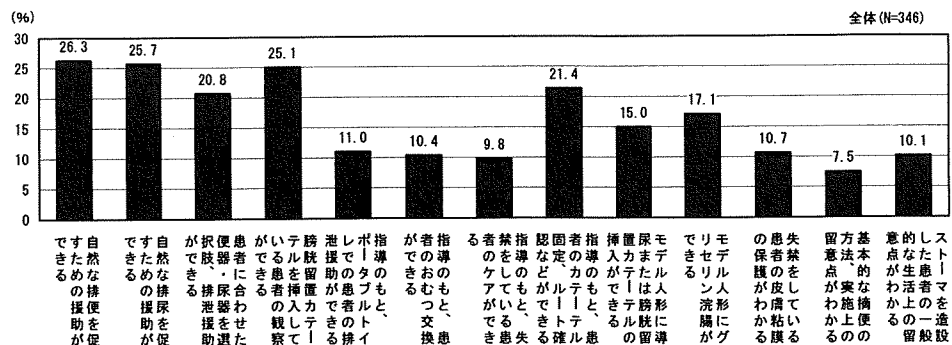
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ③排泄援助技術

・「自然な排便を促すための援助ができる」(26.3%) が最も高く、次いで、「自然な排尿を促すための援助ができる」(25.7%)、「膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察ができる」(25.1%)、「指導のもと、患者のカテーテル固定、ルート確認などができる」(21.4%)、「患者に合わせた便器・尿器を選択肢、排泄援助ができる」(20.8%) などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ③排泄援助技術》



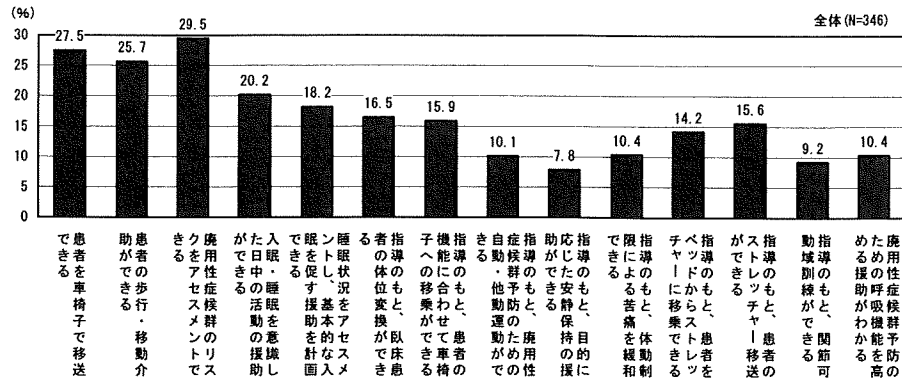
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ④活動・休息援助技術

・「廃用性症候群のリスクをアセスメントできる」(29.5%) が最も高く、次いで「患者を車椅子で移送できる」(27.5%)、「患者の歩行・移動介助ができる」(25.7%) などの順になっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ④活動・休息援助技術》



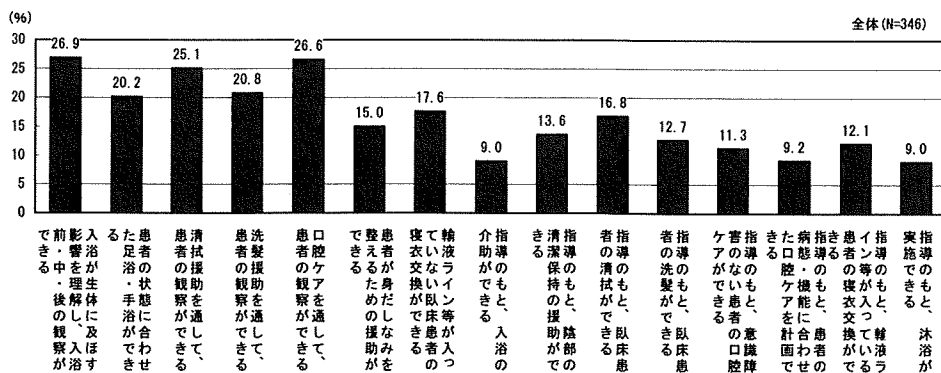
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑤清潔・衣生活援助

・「入浴が生体に及ぼす影響を理解し、入浴前・中・後の観察ができる」(26.9%) が最も高く、次いで、「口腔ケアを通して患者の観察ができる」(26.6%)、「清拭援助を通して患者の観察ができる」(25.1%) などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑤清潔・衣生活援助》



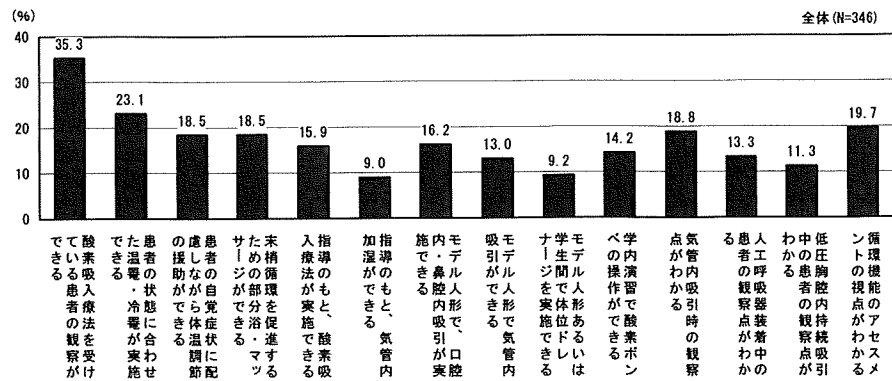
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑥呼吸循環を整える技術

・「酸素吸入療法を受けている患者の観察ができる」(35.3%) が最も高く、次いで「患者の状態に合わせた温電法・冷電法が実施できる」(23.1%) などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑥呼吸循環を整える技術》



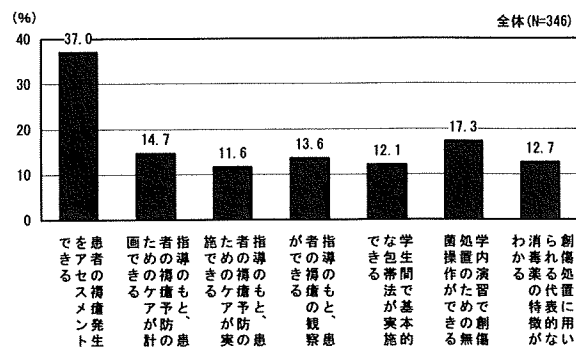
2. 調査結果

VII. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑦褥瘡管理技術

・「患者の褥瘡発生をアセスメントできる」(37.1%) が最も高くなっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑦褥瘡管理技術》



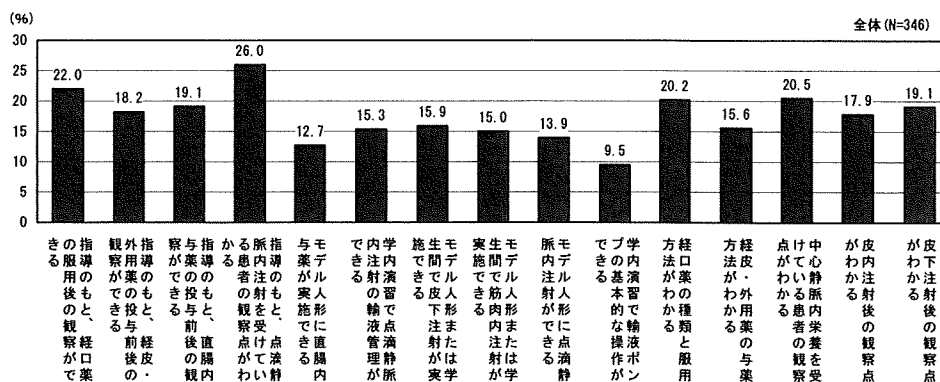
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑧与薬の技術

・「指導のもと、点滴静脈内注射を受けている患者の観察点がわかる」(26.0%) が最も高く、次いで、「インシュリン製剤を投与されている患者の観察点がわかる」(22.5%)、「指導のもと、経口薬の服用後の観察ができる」(22.0%)、「中心静脈内栄養を受けている患者の観察点がわかる」(20.5%)、「経口薬の種類と服用方法がわかる」(20.2%) の順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑧与薬の技術》

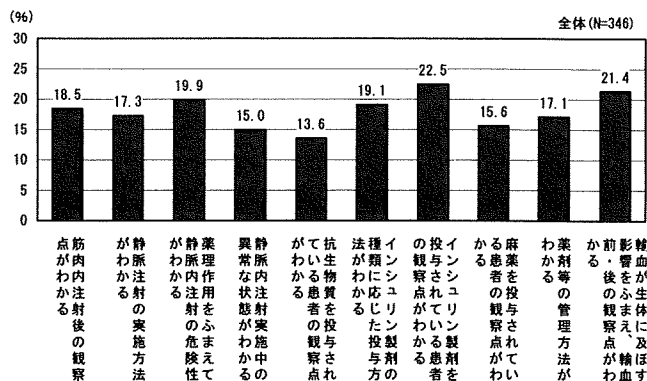


2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑧与薬の技術

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑧与薬の技術 (続き)》



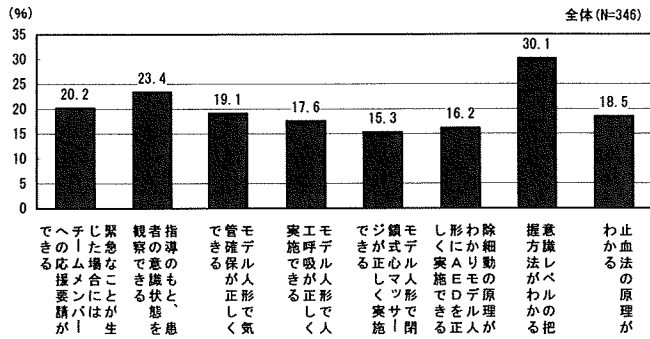
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑨救命救急処置技術

・「意識レベルの把握方法がわかる」(30.1%) が最も高く、次いで「指導のもと、患者の意識状態を観察できる」(23.4%) などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑨救命救急処置技術》



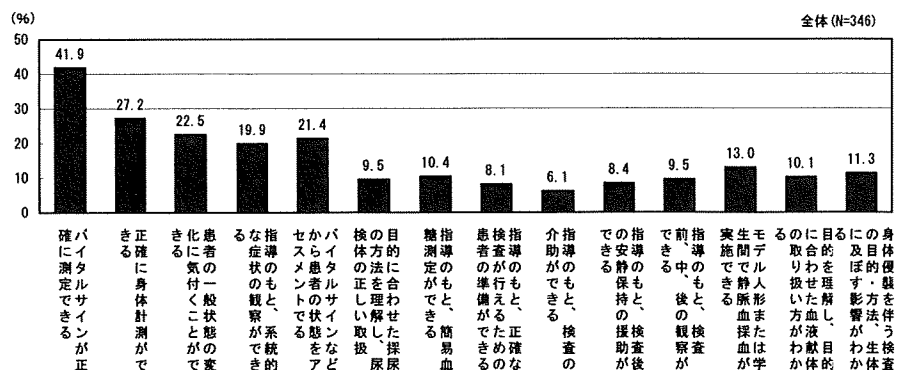
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑩症状・生体機能管理技術

・「バイタルサインが正確に測定できる」(41.9%) が最も高く、次いで「正確に身体計測ができる」(27.2%) などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑩症状・生体機能管理技術》



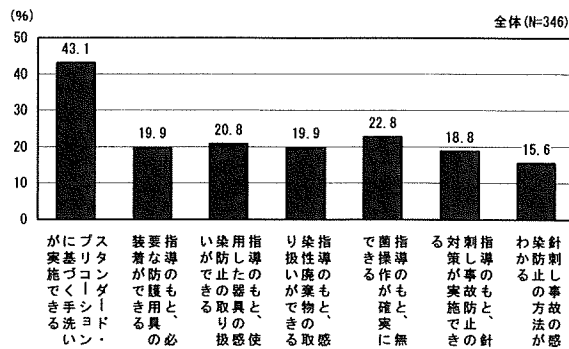
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑪感染予防の技術

・「スタンダード・プリコーションに基づく手洗いが実施できる」(43.1%)で最も高くなっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑪感染予防の技術》



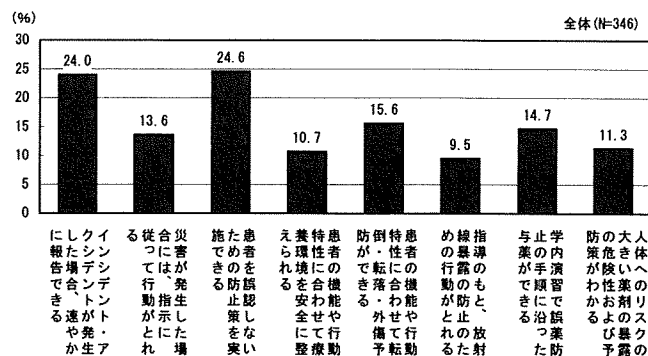
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑫安全管理の技術

・「患者を誤認しないための防止策を実施できる」(24.6%)が最も高く、次いで「インシデント・アクシデントが発生した場合、速やかに報告できる」(24.0%)などの順となっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑫安全管理の技術》



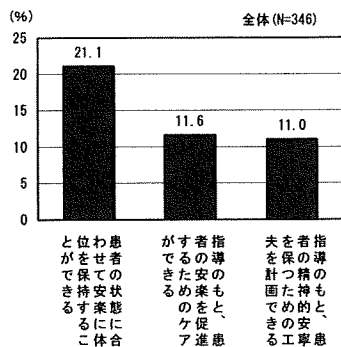
2. 調査結果

Ⅶ. 看護実践力として必要な卒業時の技術到達レベルと出題範囲について

(3) 必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑬安楽確保の技術

・「患者の状態に合わせて安楽に体位を確保することができる」(21.1%) が最も高くなっている。

《必須問題としての出題が望ましいと考える項目 ⑬安楽確保の技術》



68

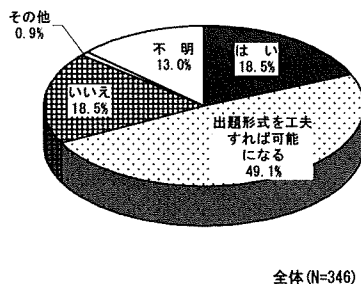
2. 調査結果

Ⅷ. 看護実践力を評価するための出題方法について

(1) 多肢選択式看護師国家試験によって看護実践力評価は可能だと思うか (問1)

- ・「出題形式を工夫すれば看護実践力評価は可能になる」と考えている人が全体の49.1%で最も多い。
- ・『可能だと思う』(=「はい」+「出題形式を工夫すれば看護実践力評価は可能になる」)は全体の67.6%となっている。

《看護実践力評価は可能だと思うか》



69

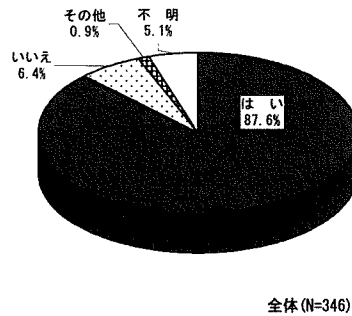
2. 調査結果

Ⅷ. 看護実践力を評価するための出題方法について

(2) 看護実践力評価のために代表的な看護の現象を抽出し、体系化することが重要だと思うか (問2)

・全体の87.6%が代表的な看護の現象を抽出し、体系化することが重要であると考えている。

《代表的な看護の現象を抽出し、体系化することが重要だと思うか》



70

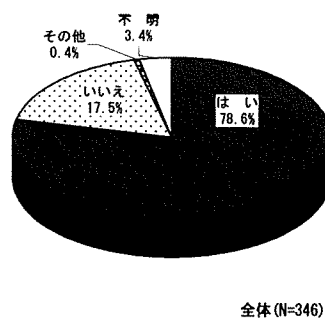
2. 調査結果

Ⅷ. 看護実践力を評価するための出題方法について

(3) 看護実践力を評価する場合、出題形式として状況設定に基づく必要があると思うか (問3)

・全体の78.6%が出題形式として状況設定に基づく必要があると考えている。

《出題形式として状況設定に基づく必要があると思うか》



71

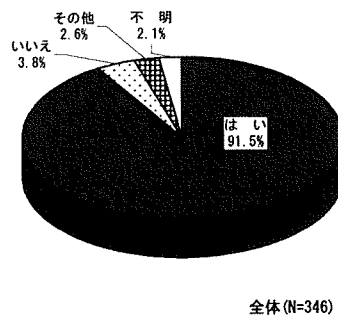
2. 調査結果

Ⅷ. 看護実践力を評価するための出題方法について

(4) 看護実践力を問う出題の題材に図やイラストが有効だと思うか (問4)

・全体の91.5%が図やイラストが有効だと考えている。

《図やイラストが有効だと思うか》



72

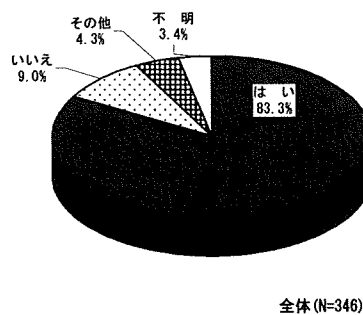
2. 調査結果

Ⅷ. 看護実践力を評価するための出題方法について

(5) 看護実践力を問う出題の題材に写真が有効だと思うか (問5)

・全体の83.3%が写真が有効だと考えている。

《写真が有効だと思うか》



73

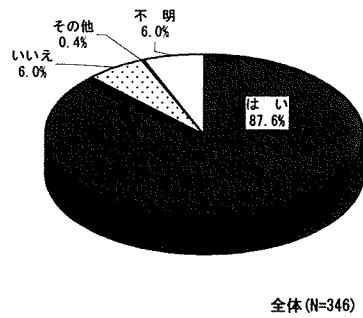
2. 調査結果

VIII. 看護実践力を評価するための出題方法について

(6) 看護実践力を問う出題のためのプロジェクトチームによる問題開発が必要だと思うか (問6)

・全体の87.6%がプロジェクトチームによる問題開発が必要だと考えている。

《プロジェクトチームによる問題開発が必要だと思うか》



Ⅱ. 分担研究報告書

(資料3) 作成された問題の分析

(資料4) 修正イーベル法（合格水準設定方法）による分析（難易度の分析）

(資料5) 保健師問題作成数と問題作成能力向上のための研修会資料

保健師国家試験問題作成力の向上とプール制に関する研究

研究分担者 村嶋 幸代 東京大学大学院医学系研究科 地域看護学

研究要旨 保健師国家試験研究班（全国保健師教育機関協議会との連携）が保健師国家試験問題作成についての研修会を開催し、会員校に問題作成を呼びかけると共に、応募された問題を研究班班員がブラッシュアップし、その応募問題の傾向を分析した。さらに、修正イーベル法の判定を用いて、第95回保健師国家試験の問題の必要度と難易度を吟味し、問題の傾向と内容の分析を行った。

村嶋幸代・東京大学大学院医学系研究科 地域看護学 教授
（研究協力者）後閑容子、岸恵美子、松田宣子、野村美千代、中島歌与子、酒井陽子、山口 忍、宮田延子、豊田ゆかり、安藤陽子

A. 研究目的

応募された問題をブラッシュアップするとともに、その応募問題の傾向を分析すること、修正イーベル法の判定を用いて、第95回保健師国家試験の問題の必要度と難易度を吟味し、問題の傾向と内容の分析を行うことが目的である。

B. 研究方法

- 1) 全国保健師教育機関協議会（以下、全保教）に協力の継続を依頼し、保健師国家試験検討研究班を再組織する。
- 2) 全保教の会員校に問題作成を依頼し、応募された問題をタクソノミーなどをもとに分析を行い、多様な問題形式の特徴等の検討、保健師としてふさわしい知識や実践能力を的確に評価することができる出題内容と形式の検討を行う
- 3) 第95回保健師国家試験問題を修正イーベル法を用いて分析し、難易度の安定化を図ること、保健師に必要な技能である地域における健康問題を把握あるいは予測するための判断力を問うスキルスアナリシスを目指した問題を検討するために検討を行った。
（倫理面への配慮）
問題作成の方法と目的を説明し、協力を求めた。また、修正イーベル法調査への協力は自由意志であることを口頭で説明し、回答記入をもって協力の意思表示とした。また、九州大学医系地区部局研究倫理審査委員会の審査によって許可された。
（許可番号21-60）

C. 研究結果

- 1) 全国保健師教育機関協議会（以下、全保教）に協力を依頼し、国家試験対策委員会10名を選出し、保健師国家試験検討研究班を再組織した。
- 2) 約300問程度の問題のブラッシュアップを行った。タクソノミーな出題領域は、地域看護学Ⅱが多く、対象別の個別指導が多かった。逆に、個別・集団の接近技法や直接的支援方法に関する設問が少なかった。タクソノミーレベルは「知識を問うレベル（Ⅰ）」が多く、判断を問う問題が少なかった。特に、保健福祉行政論では、法律を知るだけ、制度を確認するのみが多かった。
- 3) 第95回保健師国家試験問題を修正イーベル法を用いてRDIを算出。対象は163名の受験生（大学2校、短期大学専攻科2校、専修学校1年課程 1校、4年課程1校）。RDIが高すぎると判断した設問（ $RDI \geq 0.65$ ）を抽出したが、保健師に必要な技能を評価するためには、問題が簡単すぎる問題が多かった。

D. 考察

昨年度は問題作成能力向上の研修会を開催し、問題作成活動によって問題の応募を図るとともに、保健師として必要なスキルとはなにか、また、それを評価する問題を検討した。応募された問題では知識を問う問題が多かった。

第95回保健師国家試験問題の分析結果、保健師の知識がなくても回答可能な問題など、簡単に回答できる問題が多い傾向が示された。

E. 結論

応募された問題の検討、および第95回保健師国家試験問題の分析においても、保健師に必要な技能である地域における健康問題を把握あるいは予測するための判断力を問うスキルスアナリシス型の問題が少なかった。

(資料3)

保健師国家試験応募問題からみた出題傾向と保健師国家試験のあり方

I. 「保健師国家試験問題」募集の経緯と本研究の意図

保健師助産師看護師国家試験問題の公募システム¹⁾は平成16年からスタートしている。これは、問題を多数プールすることにより、国家試験の質の向上を狙ったものである。このしくみが機能するためには、国家試験で問うべき能力を確実に問うことのできる問題が、全分野にわたり多数揃っていることが必要である。しかし、全体的に応募が少ないことが指摘されており²⁾、このままではプール制の実施は程遠いと危惧される。これを乗り切るためには、各分野にわたって必要な問題を揃える必要がある。

全国保健師教育機関協議会(以下、全保教)は、保健師教育の質向上を図ることを目的とし昭和55年に創立された教育機関の団体である³⁾。国家試験対策委員会を中心に、保健師国家試験の質の向上に向けて鋭意取り組んできた。毎年、国家試験終了直後には、出題された問題を全国の会員校で検討し、それを集約して提言をしてきた。また、試験環境についても調査し、報告書に纏めて提言してきた⁴⁾。平成20年度からは、厚生科学研究「看護師等国家試験の改善に関する研究」(主任研究者:川本利恵子)の一環として、全保教の国家試験対策委員会が保健師国家試験問題作成についての研修会を開催し⁵⁾⁶⁾、会員校に問題作成を呼びかけると共に、提出してもらった問題を委員会委員がブラッシュアップした上で、厚生労働省の公募システムを通して応募した。同時に、応募問題の傾向を分析した。

保健師の能力には、様々な側面がある⁷⁾⁸⁾。この基礎力を測るのが国家試験であり、その内容は、保健師助産師看護師国家試験出題基準に提示されている⁹⁾。しかし、保健師の能力は多岐に渡り、その中で表現しやすい能力と表現しにくい能力がある¹⁰⁾。これは、保健師の能力や専門性のうち、可視化できやすい部分と可視化しにくい部分を示すと考えられる。このため保健師国

国家試験問題作成の出題傾向を分析することにより、保健師の能力や専門性を明確にする上での課題の一端を提示できると考えられる。本稿では、これら一連のプロセスを通して、保健師の専門性を明確にする上での課題を明らかにすると共に、保健師国家試験のあり方についても検討したい。

Ⅱ. 研究方法

1. 分析対象資料

平成20年度に全保教の会員校(当時、102校)に保健師国家試験問題の作成を依頼し、平成20年8月から11月までに保健師国家試験問題として応募された252問を分析対象とした。

2. 分析方法

1) 作成された問題を平成15年度の国家試験出題基準⁹⁾に沿って分類し、その出題傾向を明らかにした。

2) 作成された問題について、タキソノミーを分類した。タキソノミーは、教育目標分類学に基づく問題分析方法で、単純想起型(I型)、推定型(I'型)、解釈型(II型)、問題解決型(III型)に分類され、上位の方が、問題レベルが高いとされる¹¹⁾。

3) 集まった問題について1問1問を検討し、「国家試験問題作成の基本的ルール」¹²⁾に基づいてブラッシュアップすると共に、ブラッシュアップの必要度を判断した。同時に応募問題の内容について検討し、保健師としての技術を問う問題であるかについて討議し判断した。

3. 倫理的配慮

問題作成を依頼する時に、①提出された問題は、厚生科学研究「看護師等国家試験の改善に関する研究」(主任研究者:川本利恵子)の一環として問題を修正・加筆・処理すること、②委員会への応募をもって、その問題を全国保健師教育機関協議会が管理することに同意されたとみなすこと、について説明し、協

力を求めた。

Ⅲ．結果

1. 国家試験出題基準に基づく分析（表 1）

最初に、平成15年度国家試験出題基準⁹⁾に基づいて、提出問題を分類した。

試験科目別では、地域看護学が125問（49.6%）であり、保健福祉行政論110問（43.7%）、疫学・保健統計17問（6.7%）であった。設問形式としては、一般問題が226問（89.7%）、状況設定問題は26問（10.3%）であった。状況設定問題では、地域看護学が26問中24問（92.3%）を占めた。

地域看護学125問のうち地域看護学Ⅱが81問（64.8%）で最も多く、次いで地域看護学Ⅳが21問（16.8%）、地域看護学Ⅲが12問（9.6%）であった。最も少ないのは地域看護学Ⅰで11問（8.8%）であった。

試験科目別の作成状況は、以下のとおりである。

まず、地域看護学Ⅰ「目標1：地域で生活する人々の健康問題の解決や地域の健康課題の組織的な解決に対する地域看護活動の基礎的な考え方の理解を問う」の大項目「地域看護学の成立基盤」は3問、大項目「地域看護学の構成」の中項目「活動方法」の状況設定問題が3問あった。また、「目標2：地域環境の変化とあわせ、人々の健康への影響と、健康課題への個人ならびに地域組織の対処行動についての理解を問う」については、大項目「地域の人々の保健関連行動」の中項目「個人の健康課題への対処行動」が5問作成されていた。

地域看護学Ⅱは、「目標があらゆる発達段階、健康レベル別に個人・家族および小集団の生活と健康状態を評価できる能力を問う。また、人々が主体的に問題を解決できるよう地域特性をふまえた適切な接近技法・技術を選択し、介入することのできる基礎的能力を問う」であり、保健師としての具体的スキルを問う重要な項目である。そのスキル（直接的支援技術）の出題は「健康教育」が5問、個別・集団の接近技法や直接的支援方法に関する